

よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む道徳科の授業づくり

－「考え、議論する道徳」を目指したサポートブックの活用と充実・改善を通して（2年次／2年計画）－

〈道徳教育研究グループ〉

佐藤るみ¹、佐々木千春²、太田絵美³、西井鮎美⁴、菅原啓士⁵、高橋泰弘⁵

角田市立桜小学校¹、柴田町立船岡中学校²、多賀城市立城南小学校³、大和町立鶴巣小学校⁴、宮城県総合教育センター⁵

【要約】令和元年度「考え、議論する道徳」の授業づくりを支援するために作成されたサポートブックに、「授業づくり」「見取りと評価の工夫」「協働による授業づくり」の3つの内容を加え、充実・改善を図った。サポートブックを活用した授業実践と校内研修会を通して、サポートブックが「考え、議論する道徳」の授業づくりを支援する資料として有効であるかを検証した。その結果、教師の授業づくりへの意識の向上と、児童生徒の発言や記述の内容等に変容が見られるようになり、サポートブックの有効性を確認することができた。

【キーワード】 「考え、議論する道徳」、授業づくり、道徳科の評価、校内研修、協働による授業づくり

1 はじめに

(1) 昨年度の研究から

道徳の教科化により、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育むために、「考え、議論する道徳」への転換が求められている。

昨年度は、教師一人一人の道徳科の授業づくりを支援する資料としてサポートブックを作成し、「考え、議論する道徳」の授業づくりについて研究を行った。その結果、サポートブックが、教師の「考え、議論する道徳」の授業づくりを幅広く支援できること、サポートブックを活用した研修会を行うことで、「考え、議論する道徳」の理解につながる事が分かった。サポートブックを活用することで「考え、議論する道徳」への理解が深まった教師が多く見られた。しかし、授業の具体的なイメージを持つことについての課題が挙げられた。このことから、「協働による授業づくり」を一層推進することで、それぞれの教師が抱えている道徳科の授業づくりに対する課題を解決し、教師間の共通理解や意識の向上を図ることが必要であるということが分かった。

(2) 研究の方向性

本研究は、副題の「考え、議論する道徳」について、道徳的価値について、「これまでの経験や感じ方と照らし合わせ、自分との関わりで考えること」「多様な考え方、感じ方と出会い交流すること」で、「自分の考え方、感じ方を明確にし、議論することを通して、自己（人間として）の生き方について考えを深めること」と捉え、研究を進める。

「考え、議論する道徳」のイメージを持ち、授業を実践することができるようにするために、授業づくりを支援する「基本的な理論」「指導の要点」と教材関連表「学習指導過程4つのポイント」をサポートブックに加える。

また、昨年度十分に示すことができなかった「見取りと評価の工夫」について、具体例を示し、授業

構想から評価までの流れを把握できるようにする。評価を指導の改善につなげ、「考え、議論する道徳」の授業づくりの充実を目指す。

さらに、昨年度の課題として挙げられた「協働による授業づくり」を推進するために、校内研修や指導体制の工夫について示した『協働による授業づくり』の推進の項目を加え、学校全体で教師の指導力向上を図ることができるようにする。

以上のことを通して、サポートブックの充実・改善を図る。

(3) 研究の検証

研究員と所属校教師によるサポートブックを活用した授業や研修会の実践と、所属校教師を対象とした意識調査により、充実・改善を図ったサポートブックが「考え、議論する道徳」の授業をイメージさせ、授業づくりを支援する資料として有効であるかを検証する。

2 研究の内容

サポートブックを、「考え、議論する道徳」の授業づくりを支援する資料として、更に活用しやすくするために、「授業づくりの支援」「見取りと評価の工夫」「協働による授業づくり」の3つの内容を加えることで充実・改善を図る。

(1) 授業づくりの支援

「考え、議論する道徳」の授業づくりを支援するために、以下の成果物を作成し、活用する。

① 「基本的な理論」の作成

サポートブックに「教科化の背景」「考え、議論する道徳」の捉え方等を、授業づくりを行う上で押さえておくべき基本的な理論として加え、全教師の共通理解を図ることができるようにする。

② 「指導の要点」と教材関連表の作成

「考え、議論する道徳」の授業を行うためには、教師が明確な意図を持って授業を構想することが大

切である。小・中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（以下「学習指導要領解説」）に示されている各内容項目の「指導の要点」と教材の関連を『「指導の要点」と教材関連表』（以下「関連表」）として例示し、授業構想を支援できるようにする（表1）。

表1 「指導の要点」と教材関連表 A-(1)（一部抜粋）

「指導の要点」と教材関連表		＜内容項目A 小学校「善悪の判断、自律、自由と責任」＞				
指導の要点	教材名	学年		小1		小2
		ダメ	それって、おかしいよ	わすれられないえがお	おれたものさし	二つの声
低学年	よいことと人間としてではいけないことを区別すること。	○	◎		○	
	よいと思ったことができたときのすがすがしい気持ちを思い起こすこと。	◎		◎		
	よいと思ったことを進んで行うこと。		○	○	◎	

③ 「学習指導過程4つのポイント」の提示

「考え、議論する道徳」の学習指導過程を構想する際に、「問題意識を持たせる」「自分との関わりで考えさせる」「多面的・多角的に考えさせる」「自己（人間として）の生き方について考えさせる」の4点を「学習指導過程4つのポイント」（以下「4つのポイント」）として示す。

（2）見取りと評価の工夫

サポートブックに示している道徳科の評価に、評価の意義、見取りの方法と工夫、大きくくりなまとまりでの評価を加え、評価の基本的な考え方を示す。ワークシートの活用方法や板書の工夫など、具体例を複数示すことにより、教師が評価方法や、授業構想から評価までの流れを把握できるようにする。また、教師が自らの指導を評価し、その評価を指導の改善に生かす、指導と評価の一体化の重要性について示す。

（3）「協働による授業づくり」の推進

サポートブックに『「協働による授業づくり」』の推進を加え、サポートブックを活用した校内研修や指導体制の工夫について具体例を示す。

道徳教育推進教師が中心となって校内研修を行う際に活用できる資料とし、「考え、議論する道徳」の授業づくりへの理解と意識の向上を図り、指導力の向上を目指す。

3 サポートブックの活用例

研究員が、サポートブックを活用して授業を構想し、所属校で授業実践と校内研修会を行った。以下はサポートブックの活用例である。

（1）「基本的な理論」の活用

校内研修会でサポートブックを活用し、授業づくりを行う上で押さえておきたい「基本的な理論」に

ついて確認し、共通理解を図った。

（2）「関連表」を活用した授業のねらいの設定

授業を構想する際に、明確な意図を持って授業のねらいを設定するために、サポートブックの「内容項目集」とともに、「関連表」を活用した。

例えば、小学校中学年の「善悪の判断、自律、自由と責任」の指導内容は、「正しいと判断したことは自信をもって行うこと」と示されている。同じ「善悪の判断」という内容項目を扱った教材でも、「関連表」と照らし合わせると、授業のねらいが違ったものになり、授業のねらいを焦点化することができた。

（3）「4つのポイント」を活用した授業構想

「4つのポイント」に沿って学習指導過程を構想することで、授業のねらいに迫るための発問や学習活動を設定することができた（表2）。

表2 「4つのポイント」を活用して構想した学習指導過程の

例(中3 C-(13)「勤労」)

導入	○問題意識を持たせる。
	○自分との関わりで考えさせる。
展開	・2年生で実施した職場体験学習を想起させる。 ・(発問)「あなたは将来、好きな仕事と安定した仕事のどちらを選びたいですか」
	○自分との関わりで考えさせる。
	・(発問)「あなたが主人公のように職業選択を迫られたら、『好きな仕事』と『安定した仕事』のどちらを選ぶと思いますか」
終末	○多面的・多角的に考えさせる。
	・ペアで意見交換をする場を設定する。
	・ワークシートに、友達の考えを聞いて共感できる部分をメモするスペースを設ける。
	・(発問)「自分とは異なる立場の人に言いたいことや聞いてみたいことはありますか」
終末	○人間としての生き方について考えさせる。
	・自分の進路選択や職業選択をイメージさせる。
	・「進路や将来の仕事を考える時に大切にしたいこと」について、授業を通して考えたことを書く。

（4）見取りと評価の工夫

サポートブックに示した「見取りの工夫」を基に、授業中や授業後に見取りを行った。以下は、研究員が実践した見取りの例である。

道徳ワークシート 「ネット将棋」

☆「責任を持つ」とは？

係の仕事をきちんとする、人に迷惑をかけない
任されたことをちゃんとする、自分で判断する

☆「責任を持つ」とは？

人に嫌な思いをさせない、自分の行動を認める
逃げない、自分も相手も納得できること

図1 導入と終末で同じ発問をして変容や考えの深まりを見取るワークシートの例(中2 A-(1)「自由と責任」)

① 見取りを適切に行うためのワークシートの工夫
授業の導入と終末で同じ発問をすることで、生徒の変容や考えの深まりを見取った（図1）。

② 見取りと授業評価を行う際の板書の活用

授業中や授業後に、児童生徒の変容や考えの深まりを見取るために、板書を活用した。

例えば、授業中に、心情スケールとネームプレートを活用して見取った児童生徒の考えや変容を記録することや、授業後に、板書の写真と児童生徒の道徳ノートやワークシートの記述を照らし合わせて考えの深まりを見取ることができた。また、教師が「授業のねらいに迫ることができたか」という点から授業を振り返る際にも板書の写真を活用し、指導の改善を図ることができた。

(5) 「協働による授業づくり」の推進

協働による授業づくりによって授業力の向上を図るために、研究員が所属校で、サポートブックを活用して校内研修会を実施した。

① 5分コース「ワンポイント研修」

「基本的な理論」や「4つのポイント」「ポイント集」等を活用し、打合せや職員会議などの機会に、短時間で研修を行った。1回1項目に絞り、複数回の研修を重ねることで、「考え、議論する道徳」の授業づくりについての共通理解と意識の向上を図った。

② 30分コース「実践ミニ研修」

放課後に「基本的な理論」や「4つのポイント」「ポイント集」「見取りと評価の工夫」の中から2～3項目を組み合わせて研修を行った。

例えば、実際の授業の学習指導案を活用して授業の流れや発問について確認したり、児童生徒のワークシートの記述を用いて実際に評価を考えたりする等、授業づくりや見取りと評価について具体的なイメージを持ち、実践につなげられるようにした。

③ 60分コース「授業づくり研修」

放課後や長期休業期間等、十分な時間が確保できるときに、少人数グループで授業づくりを行う研修を実施した（図2）。



図2 授業づくり研修会の学習指導過程構想の様子

校内研修会で扱う教材を事前に伝え、サポートブックを活用して各自で略案を作成し、校内研修会を実施した。持ち寄った略案を基にグループで意見を出し合いながら、1つの学習指導過程を構想した。

4 研究の検証

(1) 実践による検証

① 研究員の実践から

研究員が所属校で授業や校内研修会を行う際に、サポートブックを活用した。所属校4校で、43回の授業実践と7回の校内研修会を行い、以下のような効果が得られた。

ア 「4つのポイント」と「関連表」から

「4つのポイント」と「関連表」を活用して授業を構想することで、「価値内容の理解」と「教材理解」が深まり、明確な意図を持って授業を行うことができた。どの内容項目の教材を扱う際にも活用することができ、1時間の授業の流れや発問を構想する際の参考となった。

イ 見取りを工夫することから

サポートブックに示した「見取りの工夫」を参考に、板書の写真やワークシート、座席表を活用することで、児童生徒の変容や考えの深まりを見取ることができた。そして、見取った情報を蓄積し、評価を行う際に活用できることが分かった。

授業後に、児童生徒の記述や板書の写真から、授業のねらいに迫ることができたかを振り返り、指導の改善を図ることができた。

ウ 校内研修会から

サポートブックを活用した校内研修会により、所属校教師の「考え、議論する道徳」の授業づくりへの意識の向上が図られた。短い時間でも研修を継続することで、「協働による授業づくり」が推進されるものと期待できる。特に、「授業づくり研修会」では他の教師と意見交換を行いながら学習指導過程を構想することで、「考え、議論する道徳」の授業づくりのイメージを持つことにつながった。

② 所属校の教師の授業実践から

所属校教師の、サポートブックを活用する前の授業と、サポートブックを活用して授業を重ね、2回の校内研修会を実施した後の授業を撮影し、「教師の発言」「児童生徒の発言や教師の働き掛け」「児童生徒の発言の内容」の点から授業を比較した。サポートブック活用後の授業は、「授業づくり研修会」において、協働で作成した学習指導過程を基に構想したものである（表3）。

授業を実践した教師から、「『関連表』を活用してねらいを絞った」「『4つのポイント』を活用して、発問と中心的な場面を設定した」「サポートブックや研究員の授業を参考に、問い返しの発問と板書を工夫した」という意見があった。

表3 所属校教師のサポートブックを活用する前と後の授業の比較

	活用前	活用後
教師の発言	教師が一方的に話す場面が多い。	児童生徒と対話をしながら進めている。
児童生徒の発言や教師の働き掛け	児童生徒の発言や反応が20回。 教師と発言者による1対1でやり取りをする場面が多い。	児童生徒の発言や反応が60回。 全体に投げ掛けたり、挙手で考えを把握したりしている。
児童生徒の発言の内容	挙手や指名で、悩まずにすんなりと話している。 単語だけの発言や「～だと思う」等、単純な発言が多い。	言葉を濁したり即答できず悩んだりする姿が見られる。 「～だけど・・・だ」と思う」等、葛藤がある発言が多い。

(2) 児童生徒の姿から

① 学級担任へのインタビューから

所属校教師に、サポートブックを活用して構想した「考え、議論する道徳」の授業を継続することで、児童生徒にどのような変容が見られたかについて、インタビューを行った（図3）。

- ア 発問に対してじっくり考えるようになり、自分の言葉で伝えようとするようになった。
イ きれいごとだけではなく、本音を言えるようになった。本音を言っても大丈夫という雰囲気になった。
ウ 友達の考えを聞き、取り入れようとする姿が見られるようになった。
エ 人と違う考えを言える生徒が出てきた。それを否定せず、受け入れる雰囲気が出てきた。

図3 児童生徒の変容についてのインタビューより

② 道徳ノートやワークシートの記述から

サポートブックを活用して構想した「考え、議論する道徳」の授業実践から得られた児童生徒の記述を、評価の基本的な考え方に照らし合わせ、以下のように分類した（表4、表5）。

サポートブックを活用して「考え、議論する道徳」の授業を実践し、多様な考え方や感じ方と出会い、交流する場面を設定することで、児童生徒が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させている記述や、道徳的価値について、これまでの経験や感じ方と照らし合わせ、自分自身との関わりで考える記述が見られた。

表4 道徳的価値の理解を自分自身との関わりで深めている児童生徒のワークシートの記述

学年	内容項目	記述
小4	友情 信頼	さそわれても行かないという人の意見が、自分とちがってびっくりした。でも、わからなくもない。
中3	勤労	いろんな人の意見を聞いて参考になった。でも私は、将来は自分の好きなことができる仕事に就きたいと改めて思った。

表5 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させている児童生徒のワークシートの記述

学年	内容項目	記述
小5	相互理解 寛容	すぐにおこらないことだけでなく、自分の悪いことを認めることも広い心だと気付いた。
中2	相互理解 寛容	涙の価値について考えたことがなかった。今までは痛かったり悔しかったりしたときに自分の気持ちで泣いていたが、相手のために流す涙もあることを学んだ。

(3) 意識調査による検証

所属校教師72名を対象に、サポートブックを活用した「考え、議論する道徳」の授業づくりについての意識調査を実施した。

「サポートブックは、今後の授業づくりに役立つと思うか」という質問に関して、83.5%が「思う」、16.5%が「どちらかと言えば思う」と回答しており、「あまり思わない」「思わない」と回答した教師はいなかった。「授業構想や校内研修会でサポートブックを活用することで、授業づくりについての疑問や悩みを解決できると思うか」という質問に関して、63.8%が「思う」、35.2%が「どちらかと言えば思う」、1%が「あまり思わない」と回答している。

さらに、道徳科の授業を担当する教師53名を対象に、「4月と比べて、自身の道徳科の授業で変わったと思うことがあるか」について調査した（図4）。

Q 4月と比べて、自身の道徳科の授業で変わったと思うことはありますか。(n=53)

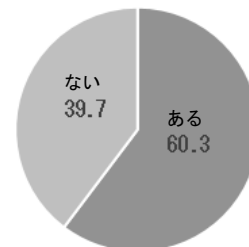


図4 自身の道徳科の授業についての意識調査

4月と比べて、自身の道徳科の授業で「変わったと思うことがある」と回答した教師の理由として、『「4つのポイント」を意識して、ねらいや発問を絞るようになった」等が挙げられた。反対に、「変わったと思うことがない」と回答した教師の理由としては、「サポートブックや研修会でインプットしたことを上手くアウトプットできない」「サポートブックを見る時間がない」等が挙げられた。

さらに、研究員によるサポートブックを活用し校内研修会の実施回数によって、道徳科の授業への意識の変化を比較した。校内研修会を1回のみ実施した学校では、「変わったと思うことがある」と回答した教師が48.7%であったのに対し、校内研修会を2回以上実施した学校では、85.7%であった（図5）。

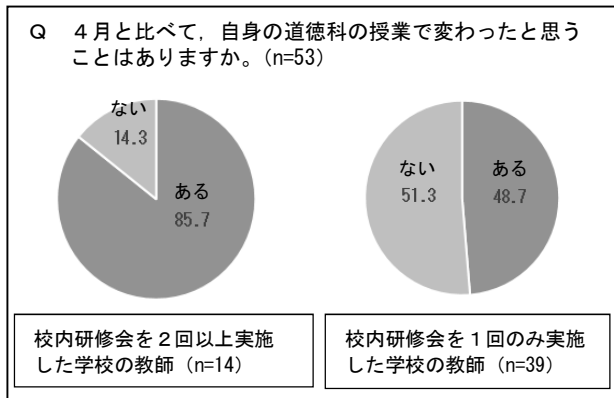


図5 研究員による校内研修会の回数による意識調査の比較

5 おわりに

本研究では、サポートブックに対して充実・改善を図り、サポートブックが「考え、議論する道徳」の授業づくりを支援する資料として有効であるかを研究員と所属校教師による実践を通して検証した。

(1) 研究の成果

① 昨年度の課題について

昨年度の課題である「見取りと評価の工夫について示すこと」「サポートブックを活用した『協働による授業づくり』を推進するための手立てを示すこと」について、以下の成果が得られた。

ア サポートブックに「見取りと評価の工夫」の項目を加え、見取りについての具体例を提案することができた。研究員の実践から、「見取りと評価の工夫」を参考にすることで、児童生徒の学習状況を的確に見取り、見取った情報を、評価に活用できることが分かった。

イ サポートブックに『協働による授業づくり』の推進の項目を加え、その活用方法についての具体例を提案することができた。所属校と研究協力校を合わせた5校で、106名の教師を対象に、研究員による研究授業や、サポートブックを活用した研修会を実施した。所属校教師への意識調査から、協働による授業づくりを推進することにより、「考え、議論する道徳」への理解が深まり、授業づくりへの意識の向上が図られることが分かった。

② 「考え、議論する道徳」の授業の充実について

研究員と所属校教師による実践を通して、以下のことから、「考え、議論する道徳」の授業の充実につながったと言える。

ア 所属校教師のサポートブックを活用する前と後の授業の比較（表3）から、サポートブックを活用することで、指導の改善が図られ、教師側、児童生徒側双方の変容につながることが分かった。

イ 学級担任へのインタビュー（図3）のウ、エや児童生徒の記述（表4）から、児童生徒が道徳的価値について、これまでの経験や感じ方と照らし合わせ、自分との関わりで考えようとする姿が見

られた。

ウ 学級担任へのインタビュー（図3）のウ、エや児童生徒の記述（表5）から、児童生徒が自分の考えだけではなく、様々な見方や考え方から、道徳的価値について改めて考えようとする姿が見られた。

③ サポートブックの有効性について

研究員とその所属校教師による実践と、所属校教師への意識調査から、以下のことが明らかになり、サポートブックを活用することで、「考え、議論する道徳」の授業をより具体的にイメージすることができ、授業づくりを支援する資料として有効であることが分かった。

ア 所属校教師への意識調査で、9割を越える所属校教師から、「サポートブックが今後の授業づくりに役立つ」「サポートブックを活用することで、授業づくりについての疑問や悩みを解決できる」という回答が得られた。

イ 所属校教師のサポートブックを活用する前と後の授業の比較（表3）や、道徳科の授業についての意識調査（図4、図5）から、授業づくりや研修会でサポートブックを継続して活用することで、授業づくりへの意識の向上が図られた。

(2) 今後の課題

① 児童生徒同士での交流

児童生徒同士で交流し、道徳的価値の理解を基に考えを深めさせるための手立てを示していくことが必要である。

② 各校における「協働による授業づくり」の推進

各校において、道徳教育推進教師が中心となり、サポートブックを活用した「協働による授業づくり」を実践することについて、検証を進めたい。

以上2点について、今後も「考え、議論する道徳」を目指した授業実践を重ね、更に研究を進めていきたい。また、サポートブックを、各校で「協働による授業づくり」を推進するための資料として活用してもらえるように普及を図りたい。

【引用・参考文献】

- 1) 宮城県教育委員会：「特別の教科道徳」の全面实施に向けてリーフレット，2017

【図表等の許諾について】

図1、表4、表5は、授業実践の中で児童生徒が記入したワークシートの一部である。氏名を伏せて掲載することとし、所属校校長から使用許諾を得た。

図2は、所属校で実施した校内研修会の様子である。所属校校長と所属校教師から使用許諾を得た。

図3、図4、図5は所属校教師を対象に実施した意識調査の一部である。氏名を伏せて掲載することとし、所属校校長から使用許諾を得た。

よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む道徳科の授業づくり

－「考え、議論する道徳」を目指したサポートブックの活用と充実・改善を通して（2年次／2年計画）－

令和元年度の研究



「考え、議論する道徳」って？

授業づくりをサポートするものが必要。

教師

令和元年度作成
サポートブック

道徳科用語集
内容項目集
ポイント集
学習指導案集

「考え、議論する道徳」への理解が深まった。

授業づくりに対するやりがいが増した。

課題

- ・見取りと評価の工夫について具体例を示すこと。
- ・サポートブックを活用した「協働による授業づくり」を推進すること。

今年度の研究内容

サポートブックを活用して授業・研修会を行い、より活用しやすいサポートブックになるように充実・改善を図る。

活用

模擬授業

授業実践

校内研修

充実・改善

サポートブック

授業づくりの支援

基本的な理論

授業づくりを行う上で押さえておくべき基本的な理論を示す。

「指導の要点」と教材関連表

内容項目の「指導の要点」と教材との関連が分かるように一覧表として示す。

学習指導過程

4つのポイント

授業づくりの基本的な考え方を4つのポイントとして示す。



「協働による授業づくり」の推進

校内研修の具体例や指導体制の工夫を示す。

<研修会の例>

- ・5分コース「ワンポイント研修」
- ・30分コース「実践ミニ研修」
- ・60分コース「授業づくり研修」

見取りと評価の工夫

児童生徒の学習状況を見取り、評価までの流れを工夫例と共に示す。

研究の流れ

月	内容
令和元年度	サポートブックの作成と活用
令和2年度	
4	研究構想計画
5	模擬授業・所属校での授業
6	サポートブックの充実・改善
7	
8	
9	
10	研究の検証 まとめと考察 研究報告書作成
11	出前授業・研修会
12	
1	
2	研究発表会
3	ウェブ公開 次年度の研究計画

研究の成果

令和元年度の課題から

- ・「見取りと評価の工夫」を提案し、具体例を参考に見取りを行うことで、児童生徒の学習状況を的確に見取り、見取った情報を、評価を行う際に活用できた。
- ・「『協働による授業づくり』の推進」の具体例を提案し、校内研修会を複数回実施することで、授業づくりへの意識の向上と授業力の向上を図ることができた。

「考え、議論する道徳」の授業の充実

児童生徒の変容

- ・道徳的価値について自分との関わりで考えたり、多面的・多角的に考えたりする様子が見られた。

授業力の向上

- ・サポートブックを活用することで、ねらいを絞ったり発問を工夫したりするなど、授業の改善を図ることができた。